

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16937

研究課題名（和文）戦間期イギリス共産党における「コミュニスト・アイデンティティ」の形成

研究課題名（英文）The Making of British Communist Identity during the Interwar Years

研究代表者

瀧口 順也 (Takiguchi, Junya)

龍谷大学・国際学部・准教授

研究者番号：10596802

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：1920年代のイギリス共産党員が、コミュニストとしてのアイデンティティを形成したプロセスを、党員のレベルを区分して明らかにした。新規党員を対象としては、コミュニストとなるための最初のプロセスとしての党員訓練に着目し、その実態を綿密な資料調査を通じて考察した。幹部党員たちにとっては、モスクワにおける他国の共産党員やソ連共産党の幹部との非公式の場における接触が重要な機会だったとの議論を提起するに至った。また、1930年代におけるコミンテルンの領袖としてのスターリン権力の表象に着目し、イギリスにおけるスターリニズム受容に関する研究の端緒を開いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本国内では長きに渡り手つかずであった戦間期のイギリス共産党に関する史料を網羅的に収集し、研究の成果を公刊し始めたことは大きな学術的・社会的意義をもつ。また、英語圏においても、ソ連・イギリス共産党関係史は、党幹部レベルにおける相互関係に着目したものが主流であるが、一般党員レベルの視座から、コミニズムがどのように受容されたのかを実証的にアプローチすることで、新しい研究の可能性を拓いた。また、幹部レベルにおいても、非公式な空間における交流を通じたコミュニスト・アイデンティティの強化についての議論を、国際的な場で研究報告した学術的な意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This project has explored the process by which the members of the Communist Party of Great Britain (CPGB) formulated and fortified their Communist identities in the interwar period. The members of the CPGB were divided into two categories: the new entrants and the Party officials. For the new CPGB entrants, this project has shed a fresh light on the practices of the Party Training which all new CPGB members were required to undertake as an initial step of joining the Party. On the other hand, the Party officials too had a significant opportunity to learn about the global impact of Communism and to fortify their Communist identity in Moscow. That was not at the official arena of the Communists, such as the Comintern Congress and the plenum but at their accommodation in Moscow- the Lux Hotel.

This project also seeks to highlight the way in which Stalinism was internalised among the CPGB members by focusing on the representation of Stalin at the Comintern Congress in the 1930s.

研究分野：近現代ヨーロッパ史

キーワード：イギリス史 20世紀史 共産党

## 1. 研究開始当初の背景

二十世紀を歴史的に検証するにあたり、共産主義また共産党という政治集団が有した思想や行動、その政治・社会的な影響は現代史家や政治学者らにより長く議論されてきた。しかし、共産党や共産主義に関する実証的研究が史的裏付けをともなっていくようになってきたのは、1991年のソ連解体後に多くのアーカイヴ文書が公開されて以降のことである。この20数年の間には、さまざまな視点から各国の共産党やコミュニスト・インターナショナル(以下、「コミンテルン」と表記)に関する研究が行われているが、コミンテルン関係書の編者が指摘する通り、未だにそれらの多くは各国共産党やコミンテルンの機構分析に傾注したものが大多数を占めていた。

とくに、イギリス共産党については、膨大な数の史料が利用可能になってはいるが、現在までの研究の中でそれらが十分に活かされているとは言い難い。また従来のイギリス共産党研究では、長らくの「政治史」偏重アプローチからの脱却も果たせていなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまで十分には議論されてこなかった切り口から共産党という政治集団および共産主義者、また彼・彼女らの「コミュニスト・アイデンティティ」の形成過程を描き出す新たな史的試みである。

ナショナリズム研究やジェンダー史研究などにおいて、集合的アイデンティティの形成過程に着目するものは少なくないが、共産主義研究においてその側面は十分に注目されてきていない。本研究は、1920年の結党から第二次世界大戦の開戦期までのイギリス共産党を対象とし、同党に所属し共産主義のイギリス国内での普及と拡大を目指した人びとの「コミュニスト・アイデンティティ」の形成の過程を明らかにする。これまでのイギリス史研究・共産主義研究は、党幹部への視点に限られていたが、本研究はイギリス共産党員をいくつかのレベルに分類し、それぞれの立場におけるアイデンティティの形成過程と、彼・彼女らによるアイデンティティ表象の変遷に着目する。複数のアーカイヴ所蔵の史料を用いた、実証的な心性史研究である。

## 3. 研究の方法

本研究は、利用可能なアーカイヴ史料の博搜と同時代出版物の網羅的な資料収集を行うことで可能になる。中心となるアーカイヴ史料は、アムステルダム国際社会史研究所、マンチェスターのイギリス共産党アーカイヴ、ブダペストのOpen Society Archivesにて調査した。また、国内でも一橋大学経済研究所が、イギリス共産党が1920-1940年代に出版したパンフレット集をマイクロフィルムで保管していることを発見し、この資料も大いに活用した。

## 4. 研究成果

複数のアーカイヴにおける史料および共産党員が関わる出版物(新聞、パンフレット、回想録など)の綿密な調査から、以下のことを明らかにした。

多くの新規イギリス共産党員は、入党時には事前の政治知識をもたず、また共産主義についても理解が乏しかった。このような新規党員を、「良いコミュニスト」とするために、1920年代を通じて国内各地で党員訓練を実施するための体制・制度が整えられた。この訓練における教育内容から、同時期のイギリス共産党が目指した「あるべきコミュニスト」の様相を明らかにした。

他方で、訓練を担うことができる党員の不足から、党員訓練が党勢力の拡大につながったとは言い難い。この点から、黎明期のイギリス共産党が抱えた組織上の問題も指摘した。

イギリス共産党の結成に携わった幹部党員らにとっても、1920年代はコミュニズムに関する実践的・理論的知識を拡大する機会が必要であった。そのなかで、モスクワの中心部に位置し、ソ連国外から訪れる共産党員の宿舎・宿泊地となっていたルックス・ホテルにおける滞在経験は、直接に国外の状況を学び、また非公式な空間での人的交流を通じて、共産主義に関することを学ぶ機会となった。ルックス・ホテルの内部は、ある種の「コミュニストの公共圏」を形成し、公的な権力空間から距離をとった場所における、政治教育の機会を担っていたことを明らかにした。

1930年代中ごろになると、ソ連国内ではスターリンが絶対的な権力を掌握するようになった。しかし、この時期におけるスターリンの権力は、これまでに理解されてきたような個人崇拜を促すものではなく、「レーニン(主義)の最高の学徒」と形象されていたことを明らかにした。しかし、かつては国際共産主義の中心的空間だったコミンテルン大会において、スターリンは自

身の権力を示すことに興味はなく、コミンテルン大会はコミュニスト空間における指導者表象の中心的な場と見なされなくなっていたことを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 瀧口 順也	4. 巻 19
2. 論文標題 「良いコミュニスト」をつくる 1920年代のイギリス共産党教育課程を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際社会文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 223- 236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Junya Takiguchi
2. 発表標題 The Lux Hotel: A Communist Public Sphere in the 1920s
3. 学会等名 International Conference on Slavonic and East European Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junya Takiguchi
2. 発表標題 "Stalin as Number One? : Representation of Stalinism in the 1930s"
3. 学会等名 International Conference on Slavonic and East European Studies (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Junya Takiguchi
2. 発表標題 "Stalin as Number One? : Representation of Stalin in the 1930s"
3. 学会等名 Modern European History Seminar, University of East Anglia (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junya Takiguchi
2. 発表標題 A Public Sphere for the British Communists: The Lux Hotel in the 1920s
3. 学会等名 North American Conference on British Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Junya Takiguchi, "Spreading the Revolution, Assembling Information and Making Revolutionaries: The Bolshevik Party Congress, 1977- 22"	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Slavica Publishers	5. 総ページ数 425- 444 (510pp.)
3. 書名 Christopher Read et al (eds.), Russia's Home Front in War and Revolution, 1914-22: Book 4. Reintegration-The Struggle for the State	

1. 著者名 瀧口 順也 「スターリニズムの表象と社会動員」	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 125- 149 (314+16pp.)
3. 書名 浅岡善治、中嶋毅 (編) 『ロシア革命とソ連の世紀 4 : 人間と文化の革新』	

1. 著者名 瀧口 順也 「共産党の支配 - 『党 = 国家体制』の成立と党内統治 - 」	4. 発行年 2016年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 151- 156 (384pp.)
3. 書名 下斗米伸夫 (編) 『ロシアの歴史を知るための50 章』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----